

「蛇性の姪」における物語の場

— 記紀神話をめぐって —

金 田 文 雄

はじめに

『雨月物語』各篇は、それぞれに物語の場が周到に選びとられているといえる。そしてそのことが物語に奥行と固有の背後世界とをあたえ、短篇でありながら実に豊麗な時空間をそこに開示しているのである。ことに「蛇性の姪」

は、熊野三輪崎、石榴市、吉野、芝の里と、その場を移してゆくが、そのいずれもが古代的なイメージに充ちた、いわば「こもり」の地であり、現世と他界との境界性を持った地であることに注目したい。すなわちそこは、聖なるものと魔的なるものとが共存する両義的な場であった。

物語は王朝的な趣のもとに展開してゆくが、その背後には常に時間を超えた、根源的な神話性が横たわっている。

本稿では、主人公豊雄の夢を通路として、彼がまさに大地母神に呑み込まれんとし、またそこから覚醒し日常へと戻ってゆく過程を、主に物語の「場」に着目することで語ろうとしたものである。

なお、「蛇性の姪」本文の引用は、中村幸彦校注『上田秋成集』（日本古典文学大系・岩波書店）によった。

一

主人公の豊雄は、「海郎どもあまた養ひ、鱈の広物狭き物を尽してすなごり、家豊かに暮」す、大宅の竹助の家の次男として設定されている。本篇に限って「いつの時代なりけん」と、物語の時代があえて曖昧化されているが、全体のトーンは王朝期を想起させるものでありつつも、こと

「家」の在り方に関するかぎりは、たとえば『さんせう太夫』のそのように、地縁・血縁によつて嚴格に結び付けられた、中世末期から近世期の家族構造を思わせるものである。生産手段を含め、すべての面にわたつて、家長としてこの「家」を支配する父、また「質朴にてよく生産を治む」惣領の太郎の存在。こうした構造のなかで、豊雄は「只なすまゝ、にに生し立て、博士にもなれかし、法師にもなれかし、命の極は太郎が羈物にあらせん」といつた、「家」にとつては、いわば無用者の位置しか与えられてはいないのである。「生産」を核とした男性原理の支配する「家」の中で、「成長優しく、常に都風たる事をのみ好みて、過活心なき豊雄は、そうした「家」の構造からの疎外だけではなく、その性格造形のうえからも母性的なるものへの傾斜をみせている。すなわち太刀を発見されたことで、一層に彼の疎外状況が浮き彫りにされたときにも、豊雄がまず頼るのは太郎の嫁の刀自なのであり、また罪をこうむつた後にも、頼つていこうとするのは大和の次郎の姉の元であつたことなどもこれを証査するものであろう。

父性の欠如した「菊花の約」の丈部家、「家」を破産に導く勝四郎、「家」からドロップ・アウトする正太郎、そしてこの豊雄。上田家の養子として「家」を隆盛させるど

ころか、家産を傾けさせてしまつた秋成自身の姿が、そこにはたしかに痛みとともに投影されていたのであろう。

さて、この豊雄は物語冒頭において、「成長優しく、常に都風たる事をのみ好て、過活心なかりけり」とその性格造形が与えられている。物語の内質との関係については後述するが、ここでひとまずその基本設定を『風土記逸文丹後国』(『積日本紀』)に収められた浦島(ここでは筒川の嶼子)と比べてみたい。

ひびとりなりすがたうらほはくみびるあることくひかりき
為人 姿容秀美 風流無類

生長優しく、常に都風たる事をのみ好みて、過活心なかりけり。

『風土記』には「過活心なかりけり」といつた表現こそみあたらないが、彼もまた漁師でありながら、「風流無類」であること、また「三日三夜を経るも一つの魚だに得ず」などからは、およそ生産的とはいえない嶼子像が浮かび上がる。なお、多分に無理があることを承知しつつあえていえば、この物語は「長谷朝倉宮御宇天皇御世」の時のこととして伝えられており、「蛇性の姪」後半の場、初瀬との相通、また『日本書紀』をはじめ、本書、『扶桑略記』などが雄略天皇記に記されていることなども暗示的ではある。また一方の眞女子像の背後には、一連の道成寺伝承が影

を落としているのではあるが、そのことをもはや当然のこととして首肯しつつ、同時に、道成寺では女から蛇への変身、そして本篇では蛇が女に化身すること、すなわちそれが全く逆の構造になっていることへのこだわりも依然捨てきれないのである。したがって、五色の亀（亀比売）から美女への変身を果たす浦島伝承では、少なくともその点においては矛盾がなく、すっきりしているとはいえるのである。

いますこしこの問題にお付き合いいただけられるなら、さらに『⁽²⁾ 積日本紀』浦島子の本文と対照させてみたい。

到一太宅之門
ひとつのおほまゐるいへのかどにいたり

（『積日本紀』）

門高く造りなし、いえも大きなり

（『蛇性の姪』）

乃薦百品芳味 兄弟姉妹等 举杯献酬（『積日本紀』）
すなほちもしなのかくはしきあはひをすめはからんはさかみをあけてとりかはし

高杯平杯の清らなるに、海の物山の物盛ならべて、瓶

子土器さ、げて

（『蛇性の姪』）

これ以外には、二人の出会いが一方的に女性の側からの接近によることや、想いの告白が、これも女性の側から先に発せられること、そして男性の側がそれを受け入れることなどがあげられよう。道成寺系説話では出会いはいわば偶然であり、また男性は女性の求愛をあくまでも拒んだのである。

また、一般に異類婚姻の物語では「ただし、浦島では神婚とすべきかもしれないが、ともかくこの範疇に入るとすれば「子供の誕生が描かれるものだが、この両者はそれを欠いていて、いわば二人の純粋な愛の交歓だけが描かれている。そして、浦島がどう語られたかはともかく、どう読むかにウエイトを置くならば、そこから「人間としての日常を離れて、異界で純粋な愛欲に耽溺することは可能か」といったテーマを導くこともできるし、また浦島が玉くしげを開いた、すなわち乙姫との関係に決着を付けた時、彼は結果的には命を縮めねばならなかったのである。もつとも、この浦島にせよ、三輪山伝承にせよ、これまた通常異類婚姻譚にはタブーが設定されるのに対して、「蛇性の姪」では一見したところ、そうしたタブーを欠いているのである。

あるいはまた、男性の側に入眠が描かれていることに着目し、ここにウエイトをかけるならば、これら一連の物語はすべて豊雄の夢、すなわち幻想としてこれを読むこともまた可能であろう。一般に異界への訪問に際して入眠を伴うことは、浦島はもとより他にも多くの説話等の語るところであるが（例えば、『今昔物語』巻十六の十五）、また同じ『雨月物語』中にも「夢窓の鯉魚」があり、これも典型

的に仮死という入眠によって、湖中という異界を逍遙している。

もつとも、異界への訪問という意味では、この「蛇性の姪」では、少しくその様相を異にしており、むしろ異界のものが日常にまぎれこむといった形式をとつていて、豊雄は夢と現とのわきがたき接点をさまようといったふうである。古代の人々にとつて（例えば万葉集卷十一、十二、十三あたりには夢の歌が頻出するが）、「夢は個人と個人とを結び付ける神秘的なコミュニケーション手段、魂が行き交う私的な回路⁽³⁾」であるとすれば、現実の閉塞した状況の中で確固たる存在の場を持たなかった豊雄（秋成）にとつて、夢のうちこそが魂の住みかとして庶幾され、試みられたのであろう。こうして豊雄は、ひとたびは文字どおりに夢で、またその翌日も「門高く造りなし」た中へと入つてゆくのであるが、「敷居を越え門をくぐることは、儀礼的には、あらたな世界への再生を象徴している」⁽⁴⁾異界へと導かれていくのである。

また、そうした異界への通路ととして「吉備津の釜」では吉備の国が、そしてここでもまた物語の場としての熊野、石留市、吉野といった他界との境界性を持つ場が要求されたのである。

一一

さて、まず物語の最初の場、三輪が崎であるが、それにさきだつてこの三輪が崎を含む熊野の地をおさえておきたい。イザナギの命が葬られたところは『記』では、「出雲の国と伯伎の国との境の比婆の山」とこれを伝えるが、一方『紀』は「紀伊の国の熊野の有馬村」としている。仮に『紀』の伝承を採るならば、熊野は黄泉の国との境界をなすということになる。また、「三つ山詣」とは通常は本宮、新宮、那智を指し、本宮の祭神は家津御子（けつみこ）大神としてスサノヲ尊にあって、新宮の祭神を速玉大神として速玉之男神に、そして那智の祭神を熊野夫須美大神としてイザナミ命とするのが通説であるようだ⁽⁵⁾。そして、この三神に共通するのは、そのいずれもが死者の国に関係のある神だということである。すなわち本篇との関係でいうならば、エロスの裏側には常にタナトスが、その口を開けていたということになる。もつとも、新宮の祭神、速玉之男神はイザナギ尊が妻のイザナミ尊の死体に触れた穢れを払うために、唾を吐いたときに生まれた神であるから、死者の国の入り口にあつて、その穢れをふせぐという神格の神である。また、熊野はそもそも死者の霊の隠る「隠

国」と同じ「隠野」であるという解釈もなされている。⁶⁾一方、「三つ山」には含まれないものの、那智の青岸渡寺の前身は熊野牟須美大神であり、この「牟須美」は記紀にいうタカミムスヒ・カミムスヒのムスヒであり、物を産み出す靈力を意味していた。⁷⁾このように見てくるならば、熊野は他界の入り口であると同時に、また他界からの出口でもあり、すなわち両義的な意味において「太母」の地であるということができるだろう。すなわち、熊野の地はその本義において、死と同時にそのうちに再生をも孕んでいたのたのである。

このような熊野にあつて、三輪が崎もまた古くからの來歴を持つ地である。『紀』神武天皇記東征伝の条で、最初の大和進攻の後、神武一行は「熊野の神邑（みわのむら）」に入る。三輪はここで「神邑」と表記され、次のような記述が是につづく。「海（わた）の中にして卒（にわか）に暴風（あらしまかせ）に遇ひぬ。——中略——我が母（いろは）及び姨は、並に是海神（わたつみ）なり。——中略——常世郷に往でましぬ——中略——時に神毒氣を吐きて、人物咸に瘁えぬ。』記、『紀』の伝承の系譜に従えば、ここでいう母は豊玉姫であり、また姨は活玉姫であるから、両者は共

に海神の女であることになる。もつとも、そうであるからこそ神武の祈りが発せられたのであつた。「山の熊野」は他界との境界であるとしたが、一方、「海の熊野」はまた海神国とも境界を接していたことになるう。

「蛇性の姪」との関係でこれを見れば、異類婚姻がただちに想起されるし、同時に常世への出発地として先にあげた浦島との相通、あるいはそれはおくとしても、海の方からやってくる異類、すなわち眞女子との出会いがそこには用意されていたのである。またここで、神が「毒氣」を吐くことによつて、「人物咸に瘁えぬ。」とあるが、物語末尾近くで鞍馬寺の僧が、眞女子の「毒氣」にあたつて亡くなつてゐることを思うと、眞女子は「海の邪なる神」の後裔であろうし、これに続く条でも、夢が高倉下に神劍の存在を告げていることなど、この『紀』の神武天皇記が、「蛇性の姪」における着想のもとになつてゐることの根拠となりそうに思う。

熊野はかつて大和世界と、海人国といった異界とが重なり合うまさしく境界領域であつた。その熊野において、雨の中で豊雄は眞女子と出会う。この地で豊雄はまだ、一方では「孔子さへ倒る、戀の山には、孝をも身をも忘れて」と眞女子との愛欲に投入していこうとはするものの、「ま

だ赦しなき旅寝は親の罪し給はん」と語り、「家」あるいは日常との紐帯は保たれていた。この時、眞女子は「金銀を飾りたる太刀の、あやしきまで鍛ふたる古代の物」を豊雄に贈るが、そもそも太刀は神話的には蛇を象徴するものであり、すなわち眞女子自身を豊雄に捧げることの意味していたのである。もつとも、蛇と太刀から当然に連想されるものとしては、『記紀』の八俣の大蛇伝承があり、『紀』によればそれは「蛇の鹿正（おろちのあらまさ）」、あるいは「天蠅斫劍（あまのははきりのつるぎ）」である。そして、もしこうしたものを想起するならば、物語の結末はおのずと明らかなものとなるう。

さらには、この太刀がもとで最初の破綻が生じることになるが、自己のすべてを豊雄に捧げようとする眞女子の「地も裂るばかりの霹靂」もまた蛇神（エロス）のもうひとつのあらぶる本質にほかならなかつたのである。また、「三輪」からは当然、三輪山伝承を持つ大和の三輪が連想され、そこに蛇神の系譜が浮かび上がってくる。そして、物語もこれを追認するかのように三輪が先から石榴市にその舞台を移行させてゆくのである。

ところで、三輪崎の条は次のように終わっている。

大宅の父子多くの物を賄して罪を贖によりて、百日が

ほどに赦さるゝ事を得たり。かくて世にたち接らんも面俯なり。姉の大和におはすを訪ひて、しばし彼所に住まんといふ。げにかう憂め見つるは後は重き病をも得るものなり。ゆきて月ごろを過ごせとて、人を添て出たゝす。

そして、石榴市の冒頭。

二郎の姉が家は石榴市といふ所に、田辺の金忠といふ商人なりける。豊雄が訪らひ来るを喜び、かつ月ごろの事どもをいとほしがりて、いつくまでもこゝに住めとて、念頃に勞りけり。年かはりて二月になりぬ。

この最後の「年かはりて二月になりぬ。」を素直に解釈すれば、「やがて年も改まってはや二月となつた。」ということになるうか。ともかく年がかわつたのは、ここ石榴市においてのことであろう。物語の発端は長月下旬であり、豊雄が罪を蒙つたのは「百日がほど」であつた。些末なことに拘泥するようだが、長月下旬から百日が経過すれば一月の上旬となる。もつとも「百日がほど」というのであるから、これを約三ヶ月とみて、その年の年末に新春を家で迎えるべく、また大宅父子が「多くの物を賄して罪を贖」ことによつて許された、とみることもできなくはないが、そうすると、年末のあわたたしいなかに三輪崎を立立し、

しかもその年のうちに石榴市にたどりつかねばならないこととなる。ところで『雨月物語』の序は「明和戊子の晩春」と記す。これを信ずるとすれば、作品は明和四年に執筆されていたはずである。今かりに、明和四年のまさしく長月下旬頃に、この「蛇性の姪」が書かれつつあったとすれば、案外に辻褃が合うのである。すなわち明和四年は九月が大の月であり、翌月は小の閏九月となっている。そうすると、長月下旬から百日後は十二月上旬頃ということになるからである。試みにこの前後の年で閏月を持つ年あげてみると、明和元年（一七六四）、明和七年（一七七〇）、安永二年（一七七三）、安永四年（一七七五）があげられる。このうちで明和元年は論外として、明和七年、安永二年の閏月はそれぞれ六月と三月なので、これも除外すれば、残る安永四年は閏月が二月にあり、これも除外すれば、合う。当時の出版事情について暗いために、このあたり確かなことは言えないのだが、『雨月物語』の刊行が安永五年の四月であるが、このことからすれば明和四年の執筆が、より自然であるかもしれない。⁹⁾

三

さて、石榴市は、『枕草子』や『蜻蛉日記』などにもそ

の名が見られるほどに、王朝期以前から栄えた古代の市である。『源氏物語』でも、「玉鬘の巻」で、初瀬に参詣した玉鬘と右近とが再会を果たす場としてもちいられている。そして、これらをおまえて「蛇性の姪」でもまた、ここで豊雄と眞女子とが再会するのである。そもそも海石榴市の名が、文献に初めて登場するのは「歌垣の場」としてであった。『紀』卷十六の記事を次に掲げる。

妾（やつこ）望（ねが）はくは海石榴市の巷に待ち奉らむ一中略一果（つひ）に期（ちぎ）りし所に之（ゆ）きて、歌場（うたがき）の衆（ひとなか）に立たして

また、万葉集卷十二にもつぎのような相聞歌が見られる。¹⁰⁾

海石榴市の 八十の衢に 立ちならし 結びし紐を
解かまく 惜しも

紫は 灰さすものぞ 海石榴市の 八十の衢に 相見
る児や誰れ

海石榴市が、再会の場として選り採られたのは、直接的には『源氏物語』を着想の契機とするのであるが、それだけにとどまらず、より古代的な「市」の持つ聖性をも同時に含みこんでいたのであろう。「市の聖性は祭祀空間であったことによるのではなく、むしろそれぞれの共同体に

たいして中立的な、いわば〈無縁〉性を市がもっていたことにもとづく⁽¹⁾とする指摘があるが、秋成自身にそうした意識がはたしてあつたかどうかは解らないが、仮にこうした解釈に立つならば、「市」はまた日常と非日常との交錯の場でもありえたということになる。

ともかく、秋成は石榴市をたんに眞女子の豊雄との再会の地としてのみならず、古代的な、あるいは初原的な「婚儀」(ことほぎ)の場として設定していたのであろう。しかし、とはいふものの、この婚儀は少なくとも豊雄にとつては、そのまま寿ぐべきものにはならない。すなわちこのことは、豊雄が眞女子のエロスにとりこまれることを意味していたからにはかならないからである。

千とせをかけて契るには、葛城や高間の山に夜ごと
にたつ雲も 初瀬の寺の暁の鐘に雨収まりて、只あひ
あふ事の遅きをなん恨みける

ここには日常の時間ではなく、いわば純化されたエロスとしての仙界の時間が流れている。またこうしたことを支えるものとして、石榴市の持つもうひとつの位置、すなわち泊瀬の門前市としてのそれが意味をもつてくるであろう。『源氏物語』でも石榴市はやはり初瀬参詣の門前として「大御あかしの事、こゝにてし加へなどする程に⁽²⁾」と描か

れていた。「蛇性の姪」でも同様に「此石榴市といふは、泊瀬の寺ちかき所なりき」と、石榴市はここでも泊瀬と一体のものとして語られている。

泊瀬もまた古代からその名をとどめる霊地、もしくは聖地であり、『記』雄略記に次のような長歌に詠まれている。

隱国の 泊瀬の山は 出で立ちの 宜しき山 走り
(わしり) 出の 隱国の

泊瀬の山は あやにうら麗し(ぐわし) あやにうら
麗し⁽³⁾

ここで泊瀬には「隱国の」という枕詞が冠されているが、万葉集でも泊瀬は通常「隱国の」の枕詞をともなっている。たとえば、一四〇七番の短歌。

こもりくの 泊瀬の山に 霞立ち たなびく雲は 妹
にかもあらむ

また、「蛇性の姪」の趣に近いものとしては、「隱国の」という枕詞こそ伴わないものの、次にあげる三八〇六番の歌。

事しあらば 小初瀬山の 石城にも 隠らば共に な
思ひ吾が背

この歌は澤瀉久孝の『萬葉集注釈』によれば、「泊瀬は墳墓の地とされていた。したがってこの石城は墳墓の意

と思われる。同穴の誓いである。⁽¹⁴⁾ということになる。

枕詞「隠国」の義としては、「コモリクは幽谷密林のなか、こもりかくれたところということで、この地の風致をよく言い表わしている。古代人はこのような母胎にも似た地形の水源地帯を生命の根源のあるところと観じ、その神秘性を畏敬し、大地母神の信仰をもった。」⁽¹⁵⁾と解されている。

あるいは西郷信綱は「『こもる』のはたんなる手続きではなく、夜という時間のなかに入ることの意味する」⁽¹⁶⁾と述べているが、こうしたことを勘案するならば、ここ石榴市もしくは泊瀬で、豊雄は大地母神とともにその世界へとりこまれていったということになるだろう。さらには「那智山に名だたる滝があり、また『こもりく』の初瀬にも滝つ瀬があるが、これらばらばらに存在するのではなく、一定の図形を描きだして」いるとすれば、豊雄はここでも大地母神に、しかも前よりも一層深くとらえられていったということになる。ただし、これもまた古代的思想に立つならば、「『こもる』のは生まれ変わるため、葬歌とおぼしきものが初瀬に多いのは、偶然とはいえない」⁽¹⁷⁾とする「死と再生」の論理に立つならば、そこにはすでにして豊雄の再生の可能性が秘められていたということにもなる。もつとも物語ではこのときはまだ、豊雄による自覚的な「忌隠

り」がなされていたわけではなく、彼はむしろ無意識の世界に退行し、ますますエロスに惑溺していくのであり、自己自身の力による脱却は望むべくもなかったのではあるが。また、この石榴市は泊瀬の門前にとどまらず、そのすぐ傍には三輪山が存在する。三輪は「記」崇神天皇記に著墓伝承を伝えるとともに、神武天皇記に神武皇后出生譚を伝える地である。三輪はこのように蛇とは深い関わりを持つばかりではなく、『三輪大明神縁起』⁽¹⁸⁾でも、ここが他界の入り口であり、三輪山そのものを他界、すなわち死者の世界とするのである。

そうして「主人公豊雄のエロスへの耽溺は、ただちに聖者当麻の酒人によつて、死相を占卜されたように、本質としての『死』の切迫とふかく連続するのである」⁽¹⁹⁾とすれば、すなわち、ここ海石榴市は、再生への予兆を根底にはらみつつも、豊雄にとっては限りなく死へと傾斜していった地であった。

こうして眞女子のエロスに（それはまた豊雄のうちなるエロスともいえようし、秋成のといつてもよい）すつかりからめとられた豊雄に、自己覚醒はまったくみられない。浦島に兆した望郷もなければ、興義に生じた葛藤もまたなかったのである。したがって、豊雄の外側から、しかもエ

口スを超克もしくは解脱した人物（ここでは当麻の酒人）
によつて救いの手がさしのべられる以外にはなかったのだ
ある。

四

かくして物語は、さらにその場を吉野に移行させる。吉
野もまた、たとえば『万葉集』巻七・一一三〇に

神（かむ）さぶる 磐根こごしき み芳野の 水分山
を 見ればかなしも

と歌われるごとく、祖霊の籠もる神奈備信仰の地であつ
た。つまりここまで物語の場として選び採られた熊野、泊
瀬、吉野はそのいずれもが境界性をもつた地であり、もし
てこれらは境界の常として、魔的なるものと聖なるものの
世界という両義性を持つていたのである。眞女子は三輪崎
で豊雄と出会い、また海石榴市に豊雄を追つて来、ここで
いわばその目的を達成する。したがつて、眞女子にとつて
はこの状態が固定されることこそが望ましいのであり、ま
して吉野は彼女にとつては殊更に忌避する地であつたよう
だ。残念ながらいまのところ、物語の重大な転換点となる
地として吉野が選ばれたことの決定的な理由が見いだせな
いが、たとえば吉野で詠まれた人麿の讃歌。（『万葉集』巻

一・三十六）

やすみしし 吾が大君の 聞こしめす 天の下に 國
はしも さはにあれども

山川の 清き河内と 御心を 吉野の國の 以下略
『清』がかつて物心の神聖状態をいう語であつたことは
疑いない。この古い『清』が道德的には宣命のいわゆる
『清き直き心』『淨き明き心』を分化させ（中略）たんなる
感覺的美しさとはちがつて、神聖感の昇華したある特定の
美しさをあらわそうとしている。²⁰といった指摘。また、
『金峯山秘密伝』によれば、役の小角の祈りの果てに磐の
中から青黒の色を帯びた憤怒の姿であらわれたのが金剛蔵
王権現だという。振り上げた右手に天魔を粉碎する三鈷を
握り、宙を蹴る右足で天地の間の悪魔を降伏し、腰にあて
た左の刀印で、一切の煩惱を断ち切り、左足で地下の悪魔
を踏み押さえるというすがた²¹といった金峯山と役の小角
の力。そして、『醍醐寺縁起』の次の記述。

役行者修業之後、大蛇有大峯斗藪中絶、尊師避除之、

其後修験之道如本興業²²

この伝承は山の神の精としての蛇を畏怖する民間信仰に
触発されたものであるらしいが、尊師（聖宝）が修験道の
再興者であることを説くために大蛇を「避除」したと伝え

られたのであろう。

あるいは当麻の酒人にウエイトをかけるならば、彼は大倭神社の神官であり、大和世界にまぎれこんだ紀の國の邪神、眞女子を追い返すといった評釈の説⁽²³⁾。そしてその大倭神社の祭神は大國玉大神、並びに八千弋神であり、特に後者は「破邪顕正の神」であること。また当麻から連想される、当麻寺で修される「二十五菩薩練供養（ねりくよう）」の逆修儀礼を受けることよって「うまれきよまり」すなわちいったん死んで、あらたな人格が再生するという信仰⁽²³⁾もつとも秋成にそうした知識があつたかどうかは、いくぶん疑問ではあるが。

ともかくここで眞女子の正体があばかれ、豊雄の夢は覚めるのである。豊雄は日常に戻る以外にはなく、したがって熊野に帰ることになる。ここから物語は「逃げる男と追う女」といった様相を一層色濃くしていく—すなわち道成寺伝承に近付いていくのであり、このこともまた熊野へと物語の場が移ることを要求したのである。そして、このモチーフはまた同時にイザナギ・イザナミ伝承にも遡行しうるものであり、この意味でも物語はやはり熊野への回帰を指向していたといえるのである。

なお、豊雄の戻った芝の里の位置については諸説がある

が、ここはやはり道成寺に近い所を想定するのが妥当であるように思う。また、芝の里が選ばれたことの積極的な意味は残念ながら今のところ見いだしてはいない。

ともかくこの芝の里で、富子と結婚することで、豊雄は生活者としての再出発をはかろうとする。しかし眞女子（エロス）は依然豊雄を追う。なぜならばそれは、いまだ豊雄の内なるエロスとの決着がなされていないからにほかならない。すなわち「富子がかたちいとよく万心に足らひ」た豊雄は、自身の死への恐怖から眞女子のもととは去つたものの、ここで新たな対幻想を見いだしたに他ならなかつたからである。そのことは、「かの御わたりにては、何の中將、宰相の君などいふに添ふし給ふらん。今更にくくこそおほゆれ」と語る豊雄の姿に明らかである。

豊雄はこれまで、エロスの持つ浪漫的で幻夢的な側面のみを見ていた。ところが、その夢が覚めた時にも一度呼び起こされたエロスは彼のもとを離れない。そうして今度は俄然エロスが持つ、そのもうひとつの側面を以て豊雄に迫ってくることになる。すなわち富子への憑依、蛇体の顕現、そして「紀路の山々さばかり高くとも、君が血をもて峯より谷に灌ぎくたさん」といった「吉備津の釜」の結末を思わせる純化された情念。これらはまさに、エロスの持

つ凄惨なまでに底知れぬ深淵をのぞかせていたのである。

五

道成寺縁起においても、また「吉備津の釜」でも、安珍、正太郎はここに至って蛇体となった清姫、あるいは怨霊となった磯良によってとり殺されてしまう。そしてひとりイザナギだけが黄泉の國からの帰還をはたすのである。したがってこの時、豊雄もまたこうした運命の岐路に立っていたはずである。では、正太郎と豊雄とを分かつものは何だったのか。「吉備津の釜」では、正太郎は終始日常世界の論理に立つており、怨霊と化した磯良と対峙した時でさえもそこからついに脱却することはできなかった。つまり彼の生きる日常と、磯良の他界へとつきぬけてゆく日常を超越した論理とは、最後まで交点を結ぶ事はなかったものであり、そして非日常の側が日常を呑み込んでいく形で終っていた。

一方の豊雄は当麻の酒人によって「雄さび」を求められ、エロスへの惑溺からの覚醒を促されるのであり、また芝の里において如何ともしがなくなつた時点で、みずからを眞女子の前に投げ出している。この行為自体は必ずしも積極的なものとは見えず、むしろそこには静かな諦念さえ感じ

られるものである。豊雄によるこうした運命の受容、また自らの内にエロスの深淵を覗き込んでしまうことは、「吉備津の釜」とは逆に、主体の側に魔的なものを認知することによって、一種の自己統合が果たされたことを意味しているのである。そしてそれは、物語の主人公豊雄にとつてであると同時に、おそらくはまた作家秋成にとつてのものであつたか、もしくはあるうとしたのであろう。

もつとも、それだけで豊雄、あるいは秋成にとつて十分であつたかという点、これまたそうとも言えなかつたのである。なぜならばエロスはその全貌を必ずしもあらわにしないままに、他者、法海和尚の手によって鉄鉢に封じ込められたという結末をとらざるをえなかつたからである。だからこそ豊雄のその後は「命つ、がなし」と語られるのみであり、それ以上でも、またそれ以下でもなかつたのである。本篇を豊雄の成長物語として読む⁽²⁴⁾方⁽²⁴⁾は、その基軸においてはこれを支持するものであるが、より内的な位相でこれを捉えておきたいと思う。

そして秋成にとつて、この問題はもう一度つきつめる必要があり、本篇につづいて「青頭巾」が書かれねばならなかつたことの意味をそこにこそ求めたいと思うのである。

注

- (1) 秋本吉郎校注『風土記』(逸文丹後國) 日本古典文学大系(岩波書店)
- (2) 『釈日本紀』国史大系 第八巻
- (3) 小松和彦「異界巡礼」青玄社
- (4) 赤坂憲雄「異人論序説」砂子屋書房
- (5) 『熊野三山の歴史と信仰』
- (6) 前掲『熊野三山の歴史と信仰』
- (7) 西郷信綱『古代人と夢』平凡社
- (8) 坂本太郎他校注『日本書紀』巻第三・日本古典文学大系(岩波書店)。以下『日本書紀』からの引用は同書による。
- (9) このことについては、大輪靖弘『雨月物語』(旺文社文庫・解説)の指摘に負うところが多い。
- (10) 澤潟久孝『萬葉集注釈』第十二巻。中央公論社。以下『萬葉集』からの引用は同書による。
- (11) 西郷信綱『古代の声』
- (12) 山岸徳平校注『源氏物語』四。日本古典文学大系(岩波書店)
- (13) 西郷信綱『古事記注釈』平凡社
- (14) 前掲『萬葉集注釈』。また秋成も「金砂」八でこのことにふれている。
- (15) 藪田嘉一郎『長谷寺』
- (16) 前掲『古代人と夢』

- (17) 『古代人と夢』
 - (18) 『三輪大明神縁起』
 - (19) 高田衛「死とエロス」解釈の鑑賞 一九七六年七月号所収。
 - (20) 西郷信綱『万葉私記』第二部。東京大学出版会
 - (21) 久保田展弘『修験道・実践宗教の世界』
 - (22) 『醍醐寺縁起』
 - (23) 鶴月洋『雨月物語評釈』角川書店
 - (24) 豊島修『死の國・熊野』講談社新書
 - (25) 中村幸彦校注『上田秋成集』日本古典文学大系・解説な
どが、ここに主題を求めている。
- また、直接の引用はしなかったが、本稿を書くにあたって阿部真司氏の『蛇神伝承論序説』(新泉社)は大いに参考にさせていただいた。